

館藏品展 出品資料解説

絵図でみる江戸

～人々は絵図になにを求めたか

会期 令和8年4月21日(日)～6月20日(土)

会場 中野区立歴史民俗資料館 1階特別展示室

◎天保国絵図武蔵国(天保武蔵国絵図)[デジタル複製]

天保9年(1838)5月 原図は537×512cm

国立公文書館蔵/国指定重要文化財

○江戸幕府は慶長・正保・元禄・天保の4度、国絵図を徴収した。製作担当の大名はまず下絵を提出して幕府の検分を受け、加筆訂正の上、清書(清絵図)を2本提出した。

○天保国絵図では製作のスピードアップを図るため、元禄国絵図の写しを何本かに切り分け、大名に渡して、修正箇所を書き込むよう指示した。さらに大名が提出した下絵は、幕府自ら清絵図に仕立てた。それまでの国絵図とは全く異なるやり方である。総石高は128万1430石余、村数は3164とある。○幕府はこの時期すでに、精密な測量図である「大日本沿海輿地全図」を持っていた。それでも不正確な情報が多い国絵図にこだわったのは、幕府の権威の引き揚げを図ったのだろう。○清絵図は幕府の紅葉山文庫と勘定所に収納されたが、江戸城火災で焼けてしまったものが多い。武蔵国絵図の場合は、勘定所から明治政府に引き継がれ、内閣文庫に収まった本図が、現存する唯一の清絵図である。

●国絵図と日本総図

○幕府は国絵図を活用して、日本総図を製作した。現存するのは(a)寛永日本図、(b)正保日本図、(c)元禄日本図、(d)享保日本図である。また(e)伊能図も日本総図の一つとみることができる。○(a)寛永10年(1633)のもの、同15年のものがある。港湾など交通関係の表示が重視され、列島の形の正確性は求められていない。○

(b)正保元年(1644)製作開始。正保国絵図を継ぎ合わせるかたちで編集された。しかし、元の国絵図の精度が低いこともあり、日本列島の概形はゆがんでいた。○(c)元禄10年(1697)製作開始。(b)の出来を不満とした5代将軍徳川綱吉の命で、新たに徴収した元禄国絵図により再編集された。元禄国絵図では各国の境目を正確にするよう命じられたが、できあがった(c)ではかえって、(b)よりもゆがみが大きくなった。個々の国絵図の継ぎ合わせで済ませるには限界があったのである。○(d)享保2年(1717)製作開始。(c)の完成からまもなく、8代将軍徳川吉宗の命により編集された。交會法(二点間の角度を測定しその交点から位置を算出する)や遠望術(遠くの目立つ山=見当山などを観測し方位を測定する)などの新技術を取り入れたことでゆがみは格段に補正されたが、なおも不正確な箇所が残った。製作担当の建部賢広は「天測と距離測がどうしても必要」と述べている。○(e)寛政12年(1800)から文化13年(1816)にかけ、伊能忠敬らが全国を測量した。交會法・遠望術に加え、天測・距離測も用いた精密な実測図である。伊能は文化15年(1818)に死去したが、その死は公表されず、文政4年(1821)の「大

日本沿海輿地全図」には、幕府天文方・高橋景保の計らいで伊能の名が入れられた。海岸線の表示を主眼とするが、その完成度の高さは従来の日本総図を遙かに超え、諸外国をも驚嘆させた。この系統の図は伊能図と呼ばれる。なお、天保国絵図に基づく日本総図は製作されなかった。

◎江戸大絵図

当館蔵 宝永2年(1705) 紙本手彩 165×191cm

○寛文10年(1670)12月、日本橋の経師屋加兵衛は遠近道印の「新開江戸大絵図」1枚と「新開江戸外絵図」4枚を刊行した。いわゆる寛文「五枚図」である。それまでも実測の江戸図はあったが、不正確だった。寛文「五枚図」は精密で、後に「江戸図の祖」と呼ばれた。○寛文「五枚図」の刊行が終わるとすぐに、この五枚を縮小して一枚に編集した「江戸大絵図」が中村市右衛門、林吉永、表紙屋市郎兵衛により刊行された。しかし、道印には何の断りもなく、内容も不足していたため、道印は彼らを厳しく批判し、自ら一枚図を編集した。その際、本所・亀戸・深川辺りの情報を追加して、違いを強調している。○本図は、板屋弥兵衛が道印作として元禄2年(1689)に刊行した「改撰江戸大絵図」の系統図。上部に描かれている「お囲い」(犬小屋)の普請は元禄8年10月から始まる。その実像が描かれている数少ない史料でもある。「お囲い」があった場所は、現在の中野区役所の周辺にあたる。

【1 全国図】

1 新刻日本輿地路程全図

○成立：文化8年(1811) ○形態：木版色摺、85×128cm
○版元：東都・須原茂兵衛、浪華・浅野弥兵衛 ●長久保赤水「日本輿地路程全図」の改訂版。実測図ではないが、初めて罫線・緯線と方角線を用いた点が画期的である。実測図としては伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」(文政4/1821年完成)がその精密さで有名だが、幕府が厳しく管理したため、民間には出回らなかった。ゆえに、本図が、標準的な日本地図として広く普及した。原図は安永8年(1779)に完成し、翌年に出版された。寛政3年(1791)に重版となり、文化8年(1811)、天保4年(1833)、天保11年と版を重ねた。【メモ】赤水は常陸国赤浜村(現高萩市)出身の地理学者。安永6年(1777)、61歳で水戸藩主徳川治保の侍講(学問指南役)となった。令和2年(2020)9月、関係資料586点が国重要文化財に指定された。

2 官許日本輿地全図

○成立：明治5年(1872) ○形態：木版色摺、49×70cm
○編者：中島彰(翠堂) ○画者：木村胤鉄 ●嘉永7年(1854)出版の「日本輿地全図」が元図。明治新政府から許可を得て再版したものか。「輿」は乗物の「こし」。「輿地」は「輿に乗る地」で「大地」。右上に北海道・千島列島・樺太島の地図を貼り付けてある。下部には多くの統計表を記載している。北方への関心が高まる幕末の世相の下、弘化4年(1847)「銅鑄日本輿地全図」など既存の日本図を参考にして、人々の知識欲に応えようとしたのだろう。【メモ】

中島彰(翠堂)は幕末・明治の書家。編著に「日本物産国尽」「漢語啓蒙書翰必携」「官員鑑」「日本輿地全図 附朝鮮国全図」などがある。

3 日本国絵図

○成立：慶応元年(1865) ○形態：木版色摺、73×170cm

○版元：服部幸三郎/蔵版 ○画者：橋本玉蘭齋 ●長久保赤水「日本輿地路程全図」を元に、伊豆七島などを貼り紙で追加。赤水図に蝦夷地を加えた「大日本海陸全図」(恵比寿屋庄七版、元治元/1864年)に似ている。服部幸三郎は、戯作者の万亭応賀。主著に『釈迦八相倭文庫』(全58編232冊からなる長編合巻)などがある。橋本玉蘭齋は歌川貞秀(五雲亭)。玉蘭齋名では、間宮林蔵「北蝦夷図説」(安政2/1855年刊)の挿絵や、明治元年(1868)「陸奥出羽国郡行程全図」が有名。【メモ】歌川貞秀は初代国貞(三代豊国)門下。慶応元年「流行一覽歳盛記」で番付2位、明治元年「江戸流行細撰記」で番付1位になっている。

4 大日本国全図

○成立：天保14年(1843) ○形態：木版色摺、37×116cm

○版元：丁子屋源次郎 ●一般的な道中図に比べ、図形や方位が比較的、整っている。貞享4年(1687)に出た石川流宣「新版日本国大絵図」(本朝図鑑綱目)の影響が認められる。袋書に「大日本六拾余州一之宮郡名城下及陣屋方角記」とある。「一宮」は、地域の中で最も社格の高い神社のこと。他に各所の駄賃付け、西国三十三番順札所名などを記す。【メモ】丁子屋源次郎(文寿堂)は京都の本屋。往来物(教科書)や絵図、実用書や案内書を手がけた。

5 大日本国郡全図 諸国細見諸道改正

○成立：嘉永元年(1848) ○形態：木版色摺、42(70)×270cm ○版元：絵図屋庄八/蔵版 ●蝦夷地の松前、本州・四国・九州、琉球~朝鮮釜山を描き、諸大名の石高を記す。東北から佐渡にかけての北日本と、南端の紀伊半島は、紙を継ぎ足してある。「奈良大仏前絵図屋庄八」とあり、江戸中期から東大寺大仏殿西側に住んで奈良名所めぐりの解説冊子や絵図を出版・販売していた絵図屋庄八(井筒屋)からの刊行と分かる。御師は同じく奈良の中澤嘉七郎。【メモ】江戸後期の刊行日本地図で、大型だが、携帯用に折りたためる。

【2 地方図】

6 富士見十三州輿地全図

○成立：天保14年(1843) ○形態：木版色摺、156×166cm

○編者：秋山永年 ○撰文：船越守愚 ○版元：衆星堂/蔵版 ○彫刻：木村嘉平 ●関東・東海・甲信越の13か国(武蔵、安房、上総、下総、常陸、上野、下野、相模、駿河、甲斐、伊豆、信濃、遠江)の図版をつなぎ合わせた、大型の木版図。富士山は真上から見た構図=平面図で描かれている。国名や道路、神社や温泉、関所など、重要箇所は記号付きで記入されている。江戸後期に富士登山が流行したのを機に「富士山が見える国」というテーマが設定されたのだろう。この図は人気があったようで、安政期に再版された。【メモ】木村嘉平は、その精密な彫りが高く評

価され、当代の名工と評された。最大の成果が、松浦武四郎「東西蝦夷山川地理取調図」(安政6年/1859)である。

7 増訂伊豆七島全図 附無人島八十嶼図・相武房総海岸図

○成立：天保13年(1842) ○形態：木版色摺、107×76cm
○編者：東条信耕 ○校正：阿部喜任・高田信頌・傍島正心 ●伊豆大島、利島、新島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島の、いわゆる伊豆七島を描く。幕府はこれに式根島・八丈小島・青ヶ島を加えて「伊豆国附島々」と称した。東条信耕(琴台、1795-1878)は儒学者。医家に生まれ、大田錦城・亀田鵬斎に学んだ。越後高田藩に出仕。海防論を説いた『伊豆七島図考』が問題となり、出版差し止め、江戸所払いに。高田城下で修道館教授を務めたが、のちに東京へ戻り新政府下で神官となった。【メモ】伊豆諸島は東京都に属し、北は伊豆大島から南は燗岩まで、500km以上にわたって9つの有人島と100余りの無人島が連なる。

8 関八州輿地路程全図

○成立：天保8年(1837) ○形態：木版色摺、140×131cm
○版元：須原屋茂兵衛・須原屋伊八・須原屋佐助・永楽屋東四郎・須原屋安次郎 ○編者：内田恭 ○撰文：酒井喜照 ●「輿」は乗物の「こし」。「輿地」は「輿に乗る地」で「大地」。長さ7分(約2.1cm)＝距離1里(約4km)なので、縮尺は19万分の1。現代の地勢図(20万分の1)に相当する。相模・武蔵・上総・下総・安房・上野・下野・常陸の8国を1枚に収め、主な街道と村々、旧跡や温泉を載せる。村は小判型の囲み枠で表している。村名の下の「○」は新村。村名の上の「○」は枝村(支村)。【メモ】酒井喜照は水戸藩士で、安政2年「皇国総海岸図」の編集者。日本画家・横山大観の祖父である。

9 下野国全図

○成立：弘化3年(1846) カ ○形態：38×53cm、木版色摺 ○版元：山崎屋清七 ○編者：高柴三雄 ●幕府が「国絵図」を提出させたため、江戸時代には多くの国郡図が製作された。下野国は都賀・寒川・安蘇・梁田・足利・河内・芳賀・那須・塩谷の9郡だが、幕府領・旗本領・大名領が混在し、支配関係は複雑だった。明治4年(1871)の廃藩置県で宇都宮・烏山・壬生・黒羽・茂木・佐野・大田原・足利・吹上県ができ、秋田・水戸・前橋・館林・結城・古河・関宿・佐倉・多古・六浦・西端・高富・彦根・丹南県の飛地が置かれた。【メモ】高柴三雄は幕末の地図編集者。弘化2年(1845)に始まった近吾堂版「江戸切絵図」では、「芝愛宕丁西ノ久保辺絵図」の作図を担当した。

10 上野国輿地全図

○成立：安政2年(1855) カ ○形態：104×125cm、木版色摺 ○版元：菊屋幸三郎 ○編者：村上吾雄 ●「輿」は乗物の「こし」。「輿地」は「輿に乗った土地」で、「大地」を指す。上野国は碓氷・片岡・甘楽・多胡・緑野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽14郡からなる。かつて上野国は群馬県と完全に同一領域だったが、昭和34年(1959)以降の編入・転出で完全一致はなくなり、群馬県の方が少し大きくなった。

11 相模国輿地全図

○成立：嘉永2年(1849) カ ○形態：73×98cm、木版色摺 ○版元：菊屋幸三郎 ○編者：鶴峰彦一郎 ●相模国の郡名・郡境・城下・陣屋・宿場・村名・道路・古城・古戦場・関所・神社・寺院・名勝などを記したもので、旅行時の携帯用に製作されたか。明治維新直前の相模国は、現在の神奈川県域から、武蔵国に属していた川崎市・横浜市を除いた地域である。ただし、横浜市の一部は相模国の鎌倉郡にあたる。菊屋幸三郎(金幸堂)は江戸の地本問屋。初代歌川広重、三代歌川豊国の作品も出版した。【メモ】鶴峰彦一郎(戊申、1788-1859)は豊後国白杵郡(現大分県)出身の国学者。著作は多く、『語学新書』は近代の国語文法書の草分けとして名高い。

12 蝦夷国全図 『三国通覧図説』付図

○成立：天明5年(1785) ○形態：木版手彩、96×53cm
○著者：林子平 ○版元：須原屋市兵衛 ●『三国通覧図説』は仙台藩士林子平が、朝鮮・琉球・蝦夷や島々の風俗などを、挿し絵入りで解説した地理書。絵図5枚付きで、本図はそのうちの1枚。筋の良い元図を敷き写したのか。本来の色づかいとは異なる。林が『海国兵談』で幕府から処分を受けた際、本書も発禁となったが、友人の桂川甫周が長崎へ持ちこんだためオランダやドイツに渡り、東洋学者クラブロートのフランス語訳(1832年)など多くの翻訳版が出た。古川古松軒が『東遊雜記』で批判したように、遠方の情報や地名の誤りなど、正確性に欠ける。【メモ】処分を受けて仙台に戻った林子平は「親も無し妻無し子無し版木無し金も無けれど死にたくも無し」と詠み、「六無齋」と号した。「寛政の三奇人」の面目躍如。

【3 江戸図】

13 分間江戸大絵図

○成立：享保5年(1720) ○形態：134×175cm、木版色摺 ○版元：須原屋治右衛門/蔵版 ●「分間」「分見」は「測量」「縮尺」の意。原図は、遠近道印作「寛文五枚図」。実測に基づいており、多くの模刻版や編集版が出版された。急遽かつ無秩序に発展する江戸の複雑な地理情報を整理し図化するのは容易でなく、道印図は以後の江戸図に多大な影響を与えた。左下(南西)に別枠を設けて、江戸中期に開発が進んだ本所周辺を描く。享保3年(1718)「分間江戸大絵図」(早大図)もそうになっているが、のちにこの部分は貼り紙にして、本来の位置(右下)に付けられるようになる。【メモ】遠近道印は「東海道分間絵図」など優れた実測図を製作し「図翁」と呼ばれた。富山藩医藤井半知とする説が有力(深井甚三「図翁遠近道印一元禄の地図作者」)。

14 分間江戸大絵図

○成立：嘉永3年(1850) ○形態：164×192cm、木版色摺 ○版元：須原屋茂兵衛/蔵版 ●「分間」は「測量」「縮尺」の意味。「分見」とも。「蔵版」は「板木を所有＝版權を持つ」の意味。原図は、遠近道印作「寛文五枚図」。実測に基づいており、多くの模刻版や編集版が出版された。図の右下(南東)に江戸中期に開発が進んだ本所周辺を描く。同名図でもこの部分は、時期により、余白に別枠を設

けて描いたり、貼紙にして本来の所に付けたりしていた。本図では紙幅を拡大して全体を四角くし、一枚の中に収めている。同名図に比してサイズが大きくなっているのは、そのためである。【メモ】台場は嘉永7年(安政元/1854)築造なので、まだ描かれていない。

15 江戸近海島嶼図

○成立：年不詳 ○形態：木版色摺、96(141)×65cm ●江戸湾から伊豆七島(大島・利島・新島・神津島・三宅島・御蔵島・八丈島)の船路を描く。黒川真頼父子の蔵書印あり。黒川真頼(1829-1906)は国学者で東京帝大教授。文学・芸術・教育方面で活躍。『古事類苑』の編纂委員を務めるなど日本文化の集大成者と言われた。黒川真道(1866-1925)は真頼の四男。明治21年(1888)に『古事類苑』編纂嘱託となり、帝国博物館に勤務。『日本教育文庫』『日本歴史文庫』『日本風俗図会』等の編纂に当たった。【メモ】江戸から最も遠い有人島が八丈島。関ヶ原戦で敗れた宇喜多秀家が配流され、明暦元年(1655)11月に死去するまでの約50年間を過ごした地である。

16 再版新改御江戸絵図

○成立：文政年間(1818-29) ○形態：78×90cm、木版色摺 ○版元：西村与八 ○画者：南仙笑楚満人 ●寛政4年(1792)初版。本図には「文政再版改正」とある。刊記「御江戸の日に毎に繁く盛なるはいふもさらなり、されば貴館・高樓・神社・仏閣・名所・古跡、或は町々小路々々残さず梓に鑄て世に行はれしも、幾年か経てそこ愛たかひたるもあれ、磨滅せるもありと、予ニ新図せよ、としきりの需め止事なく、其古きにもつき耳に聴き眼に見たるを余さず改め、くハへて猶(なお)御江戸の広く目出度事をいわせ、寿永ふせんとするのみ、南仙笑楚満人図」。西村屋与八(永寿堂)は篤重・鶴喜と並ぶ、天明・寛政期における代表的版元。【メモ】南仙笑楚満人は楠彦太郎(1749-1807)。戯作者で、没後に為永春水が「二代目南仙笑楚満人」の筆名を使用したため、「初代」として区別される。

17 御江戸方角安見図

○成立：天明4年(1784) ○形態：木版無彩、31×39cm ○版元：永寿堂(西村屋与八) ○図：鈴木尚吉 ●江戸城を中心に、各方面の方角と地名を模式的に示したもの。両面摺りで、表に「天明四歲甲辰正月再刻」、裏に「増補江都名所方角神社佛閣由来略記」とある。安永3年(1774)「江戸略図」が元図か。両面摺り、図工が同じ(鈴木尚吉)という点が共通する。西村屋与八(永寿堂)は葛屋重三郎・鶴屋喜右衛門と並んで、天明・寛政期を代表する版元。文政7年(1824)「江戸買物独案内」に「経書・医書・仏書・神書・歌書・石刻・唐本・和本・寺子必読往来物・草紙・錦絵・絵本など多数の商品を扱っていた」とある。【メモ】「安見」は「見やすい」。宝暦6年(1756)の「岐蘇路安見絵図」冒頭に「猶また見安からんか為に」との表記がある。

18 江戸近郷全図

○成立：文政8年(1825) カ ○形態：59×79cm、木版色摺 ●江戸を中心に、東は小金(現松戸市)・船橋、南は羽田・神奈川、西は府中・日野、北は大宮・岩槻辺りま

で、日帰りか一泊で往復できる範囲の遊覧地図として作成。刊記「此図ハ江戸ヲ中トシテ、東ハ小金・舟橋、南ハ羽田・神奈川、西ハ府中・日野、北ハ大宮・岩槻ヲ限リ、山川・原野・神社・仏寺・名所・古跡ノ類、数日ヲ費ヤサスシテ遊覧スヘキモノヲ図シテ、遊行ヲ好ム者ノ便トス、元是大概ヲシルセシ図ナレハ、堂社ノ方位、川流ノ広狭、其真景ヲ得ス、小社或ハ用水ノ如キニ至テハ略セシモノアリ、観者宜シク斟酌スヘシ」。

【メモ】文政8年（1825）に初版が刊行され、文政13年に修正版「東都近郊図」が出た。その後、この図を模した近郊図が幾つも刊行された。

19 懐宝江戸近郷全図

○成立：弘化年間（1844-47）○形態：60×75cm、木版色摺 ○版元：九皋堂 ○識語：仲田惟善 ●江戸を中心として、東は小金（現松戸市）・船橋、南は羽田・神奈川、西は府中・日野、北は大宮・岩槻辺りまでを描く。日帰りか一泊で往復できる範囲の遊覧地図として作成された。「懐宝」は「携帯用の貴重品」の意。文政8年（1825）初版。図中の識語（本文の前や後に資料や本を書写・入手した由来や年月を記したものを）を花暦一覧表に変えたのが本図で、「江戸近傍図」などの別称がある。【メモ】九皋堂は、鶴田清次（1817-9）。開成所で物産学を学び、パリ万国博やウィーン万国博の出品業務に関わった。博物館に勤務し、同局発行の「教草」では、草綿・葛布・澱粉に解説文を付した。また、九皋堂（九阜堂）と号して仲田惟善『東都花暦名所案内』を出版した。

20 安政二卯年十月二日大地震大火場所

○成立：安政2年（1855）○形態：木版色摺、73×98cm ○版元：山城屋平助 ○図：高柴三雄 ●山城屋版「松栄御江戸絵図」を元に安政大地震の被害状況を図示する。夜10時頃に発生し、30数か所で火災、死者7000人以上とある。なお、小石川の水戸藩邸では、徳川斉昭のブレンである学者・藤田東湖が狂死した。安政年間には地震が多かった。大きなものは①安政元年11/4安政東海地震（M8.4）②安政元年11/5安政南海地震（M8.4）③安政2年10/2安政江戸地震（M6.9）④安政3年7/23安政八戸沖地震（M7.5）など。人々の衝撃は大きく、地震を報じた瓦版・摺物が大量に出回った。【メモ】題箋は「松栄御江戸絵図」。附録として「地震類焼場所詳細之写」を添える。

21 焼場方角附

○成立：安政6年（1859）○形態：木版無彩、37×50cm ●安政6年2月21日、青山から出火して千駄谷、四谷、牛込、小石川の一角を焼いた大火の報。瓦版の類か。被害は武家屋敷・小屋舗12000軒余、寺院180軒余、土蔵750余、穴蔵160余、怪我人1500人余とある。増訂武江年表「安政6年2月21日、亥の刻より南風烈しかりしが、22日晚弥烈しく坤方より扇き、丑の刻青山・石蔵田芸州侯下屋敷内、松平江州侯屋敷内より出火、炎勢熾にして松平志州侯、井上河州侯下屋敷、其外諸家下屋敷数字類焼し、緑町、原宿町、久保町、…四谷大通、西は大木戸手前、東は塩町2丁目、3丁目、伝馬町2丁目迄、北側は田安侯下屋敷へ焼込、北寺町浄蓮寺、…牛込町2丁目、3丁目、廿二町、若松町、…西

青柳町、音羽町1丁目西側迄焼亡、此所にて22日辰下刻鎮火、凡諸侯上屋敷・下屋敷合廿余宇、小名は枚挙すべからず、神社3宇、寺院50余宇、町屋35町程、長凡1里8丁余、幅平均して4丁半、焼死負傷者其数を知らず。【メモ】8か月後の安政6年10月17日の火事では江戸城本丸が炎上した。

22 江戸町名いろは引

○成立：年不詳 ○形態：木版色摺、37×49cm ○版元：須原屋茂兵衛・須原屋伊八 ●懐中用に出版したものか。両面合わせて約350の町名を記す。表に江戸図あり。江戸の町名と絵図を組み合わせる体裁は、文聚堂（菊水屋忠蔵）が出した冊子「御江戸絵図いろは分町づくし」（天保12/1841年刊か）の例がある。本図はこれを参考に、一枚物に集約したものか。江戸図部分をカラー化したのが、工夫である。【メモ】須原屋伊八は浅草茅橋の書物問屋。須原屋茂兵衛の系列店で、主に医学書・古典籍を出版した。

23 江都神社名所旧跡安見画図

○成立：文化4年（1807）○形態：木版色摺、37×52cm ○版元：文寿堂・文刻堂 ○著者：梁仁左衛門 ○増補改正：十返舎一九 ●懐中用のもの。「江都」は江戸の雅名。文寿堂は、神田弁慶橋松枝町の丸屋文右衛門（丸文）。寛政年間に喜多川歌麿「青楼にわか」を出版している。文刻堂は、書物問屋の西村屋源六。文化期に本石町十軒店西側弥三郎店で、天保期に浅草黒船町で地本問屋も営む。初代歌川国貞、北川美丸（二代北尾重政）の作品を出版。【メモ】書物問屋は上方で始まり、仏書や儒学書、歴史書、辞書、医書、古典籍など内容の硬い本を扱った。地本問屋は江戸で始まり、通俗的な文学作品（草双紙、黄表紙、洒落本、読本など）や錦絵の企画・出版・販売を行った。十返舎一九は弥次・喜多珍道中記『東海道中膝栗毛』の作者。娯楽的な読み物を書く戯作者で、本の挿絵や肉筆浮世絵などを手がけた絵師でもあった。寛政6年（1794）以降は江戸日本橋通油町の版元葛屋重三郎方に居候して、本作りを手伝った。『東海道中膝栗毛』は享和2年（1802）から文化11年（1814）にかけて書いた大人気シリーズだが、その最中に本図の校正もしていたのである。

●「江戸切絵図」の原型

江戸では建物がすぐに建て替えられ、武家屋敷の配置もひんぱんに変わった。生活する上で、一定範囲の屋敷・神社・役所・商家・道路・橋を載せた地図が必要とされた。「江戸切絵図」の原型は、宝暦5年（1755）に吉文字屋次郎兵衛・美濃屋平七が刊行した「番町絵図」だが、後がなかなか続かず、21年間で8種類しか出なかった。これと並行して、天明6年（1769）「新編江戸安見図」が出た。折本仕立だが、享和3年（1803）の増補終了後も売れ続け、弘化4年（1847）まで版を重ねた。

◎近江屋吾平版「江戸切絵図」より

近吾堂版とも。嘉永元年（1848）、麴町十丁目の荒物屋・近江屋吾平が、「芝愛宕丁西ノ久保辺絵図」を売り出した。直線を多用して町割を丁寧に描き、淡い黄・青・緑の三色で色摺りした、落ち着いた色調の図柄である。坂の上がり下がり△▽の記号で表現され、地形への配慮が見られる。

わずか7年で30図を刊行し、その後1枚加えて、揃い31図となった。その後、増補・修正・改版を重ねる間に、1枚の図を2、3枚に分割することもあったため、最終的に38図になった。

◎尾張屋清七版「江戸切絵図」より

金鱗堂版とも。嘉永2年（1849）3月、麴町六丁目の地本問屋・尾張屋清七が、「大名小路神田橋内内桜田之図」を売り出した。寺社地は赤、町人地はグレー、河川・池は青、農地・原野は緑、道は黄と、土地利用の色分けが明確で分かりやすい。寺社や名所は立体的に描かれ、直感的に見つかるよう工夫されている。近吾堂版にくらべ情報量は劣るが、デザイン的には優れている。全32図。後に近吾堂版の版木を買い取るなど、江戸切絵図の市場をほぼ、独占した。

【4 東京図】

24 延寿御東京絵図

○成立：明治4年（1871）○形態：木版色摺、73×99cm ○版元：出雲寺萬次郎、山城屋佐兵衛、若林喜兵衛 ●初期の東京図には江戸図が流用された。元図は文久年間の「延寿御江戸絵図」か。刊記「嘉永六癸丑年改正、安政五戊午年新刻、明治四辛未年再刻、東京書肆/横山町一丁目出雲寺萬次郎、日本橋通二丁目山城屋佐兵衛、人形御通松島町若林喜兵衛板」。出雲寺萬次郎は、京都と江戸日本橋で営業した有名板元。幕府の御書物師として、「武鑑」の刊行や紅葉山文庫の書籍出版に関わった。山城屋佐兵衛は、藤井佐兵衛。文政年間に書林仲間に加わって「文政堂」を創業、仏教書を中心に中近世の書状や古典籍を扱った。若林喜兵衛は玉養堂。幕末維新期の書物問屋で、和本や往来物の出版に関わった。【メモ】刊記の右に「東京神社祭礼・寺院忌会日令」を載せる。

25 改正東京御絵図

○成立：明治9年（1876）○形態：72（87）×94cm、銅版色摺 ○著訳：武田勝次郎 ○出版：大西恵以 ●左下に「纏一覧」を貼り付ける。安政3年（1856）、宮城玄魚（梅素亭）は江戸町火消の纏図集「泰平纏一覧」を錦昇堂（笑寿屋庄七）から刊行した。いろは48組のうち「へ・ら・ひ・ん」を除いて「百・千・万・本」を入れ、8つに分けて、各組の纏・半纏の図、担当する町数と人数、担当町名の一覧を示した。本図では、明治4年（1871）導入の大区小区制に合わせて39組を6つに分け、図中に朱色で示している。纏の図版は「泰平纏一覧」を踏まえる。【メモ】武田勝次郎は狂歌師・戯作者。梅素亭玄魚とは師弟関係にある。

26 改正東京区分絵図

○成立：明治9年（1876）○形態：銅版色摺、71×93cm 撰文：竹原鼎 ○版元：中村熊次郎/蔵版、小林新兵衛 ●初期の東京図には江戸図が流用された。凡例「□（赤）此所ハ諸御役所 □（桃）同 第一大区 □（黄）此所ハ第二大区 □（緑）此所ハ第三大区 □（橙）此所ハ第四大区 □（紫）此所ハ第五大区 □（浅黄）此所ハ第六大区」。【メモ】竹原鼎は明治初期の出版・編集者。東京の地図や「改正東京早見町鑑」の編纂、「和漢歴史学引大全」「官省

分画官民必携」の出版に関わった。小林新兵衛は、出版老舗「嵩山房」の当主名。江戸中期に获生徂徠と親交を結んで以来、徂徠学派の版元として名をなした。

27 改正東京区分絵図

○成立：明治10年(1877) ○形態：木版色摺、一部銅版、74×94cm ○著・出版：児玉弥七 ●東京周辺の地図。上が西。初期の東京図には江戸図が流用された。左下に「東京区分」として15区6部の別、円形の町名・村名の一覧あり(この部分のみ銅版)。15区6部制は明治11年からなので、本図は先行出版である。刊記「改正再刻 版權免許 明治九年八月十四日 同十年三月改正 東京浅草区浅草馬道町三丁目老番地 著兼出版人児玉弥七。【メモ】児玉弥七(大橋屋)は地本問屋。幕末から大正12年(1923)の関東大震災まで、浅草で営業。月岡芳年、豊原国周、歌川芳藤、三代歌川広重、四代歌川国政、井上探景の錦絵を出版。特に国周の三枚絵に多く関わった。

28 明治改正東京絵図

○成立：明治4年(1871) ○形態：木版色摺、一部銅版、48×68cm ○版元：西村屋与八原版、菊屋幸三郎・吉田屋文三郎求版 ●初期の東京図には江戸図が流用された。元治元年(1864)「永福御江戸絵図」(須原屋茂兵衛・菊屋幸三郎・菊屋幸三六版)が元図か。「求版」は原版を買い求めて入手すること、または版權を手に入れること。「永福東京御絵図」と似ているが、サイズが異なる(本図はやや小)。海中に7か所の台場を図示する。赤塗りは神社・仏閣か。青線・青枠で大区小区の区分けを示す。凡例「○(緑)第一大区 ○(青)第二大区 ○(橙)第三大区 ○(空)第四大区 ○(黒)第五大区 ○(紫)第六大区」。【メモ】刊記の右に「東京十八松 名木之内 一日巡覧」を載せる。

29 開化日新東京区分全図

○成立：明治10年(1877) ○形態：銅版色摺、37×51cm ○編集・出版：綱島亀吉 ●「区分」は明治4年(1871)導入の大区小区制のこと。翌年の廃藩置県に先立つ戸籍編成の観点から導入された。東京府は6大区97小区でスタートしたが、明治6年(1873)に隣接地域が編入され11大区103小区となった。明治11年(1878)の郡区町村編制法により大区小区制は廃止され、新たに15区6部が設置された。本図はそれに先行して出版された。【メモ】綱島亀吉は、幕末維新期の地本問屋。号は辻岡屋・辻亀。明治元年(1868)4月に島鮮堂を創業。慶応2年(1866)3月に地本草紙問屋へ加入した。浅草瓦町、馬喰町で営業。月岡芳年、守川周重、楊洲周延、三代歌川広重、中澤年章、楊斎延一らの錦絵などを出版している。

30 新鑄懐中東京区分全図

○成立：明治11年(1878) ○形態：銅版色摺、50×72cm ・○出版：富田彦次郎(東崖堂) ○編集：松田貞幹 ●折本仕立て。携行品として製作されたか。「区分」の文字は、明治4年(1871)導入の大区小区制のことを指す。翌年の廃藩置県に先立つ戸籍編成の観点から導入された。初期の東京図は江戸図を流用・改変して作成されたが、左下に測量具の挿絵を入れて実測図であることを強調し、同類図と

の違いを出そうとしたものか。【メモ】「鑄」は「鑄」の異体字で、「彫る・刻する」の意。

31 改正東京絵図

○成立：明治14年(1881) ○形態：銅版色摺、51×73cm ○版元：福田熊次郎(具足屋) ○編集：村上松太郎 ●外周に建物を配置する構成は、川瀬善一編の「実地明細絵図」とよく似ている。明治17/美濃岐阜市街全図、明治19/名古屋明細全図、明治20/新鑄盛岡市実地明細図、明治22/岐阜市街新全図、明治24/函館実地明細絵図、明治25/青森実地明細絵図、明治26/札幌実地明細絵図、小樽港実地明細図などがその例。福田熊次郎(具足屋)は、明治12年頃から地本問屋を営業。小林清親、井上安治、落合芳幾、豊原国周、三代歌川広重、五代歌川国政の作品を出版した。【メモ】本図では「東京」でなく、異体字の「東京」を用いる。

32 改正東京新図

○成立：明治20年(1887) ○形態：銅版色摺、37×59cm ○版元：横山氏/蔵版 ○編集：近藤音次郎、坂本金次郎 ●題箋は「明細改正東京新図」。図の外周に建物を配置する構成は、明治中期に出た川瀬善一編「実地明細絵図」とよく似ている。近藤音次郎は、明治16年(1883)に春祥堂を創立。北村透谷『楚囚の詩』などを出版した。坂本金次郎は明治17年(1884)に『絵本清仏戦争記』を著し、近藤音次郎と共に出版している【メモ】サイズの小さく、携行用に製作されたか。

33 万世御東京絵図 明治二年改正東京絵図

○成立：明治2年(1869) ○形態：70(80)×90cm、木版色摺 ○版元：万屋庄助 ○編集：近藤音次郎、坂本金次郎 ●慶応3年(1867)に万屋庄助らが出した「万世御江戸絵図」とほぼ同じ内容。江戸の東京改名に合わせ表題を変えたものか。明治元年(1868)11月5日の町帖に、「地図に東京と記載せよ」とある。「先般江戸称改而東京と被仰出候上は、地図・書籍は勿論、絵双紙等ニ至迄、御地名を書載候類ハ都而東京と相書候様、市中え不淺様可相触候。」一『東京市史稿』市街篇第50巻p.226一【メモ】初期の東京図は江戸図を流用したものが多く、その典型である。

34 永福東京御絵図

○成立：明治4年(1871) ○形態：木版色摺、71×96cm ○版元：西村屋与八原版、菊屋幸三郎・吉田屋文三郎求版 ●初期の東京図は、江戸図を流用して作成された。元図は元治元年(1864)「永福御江戸絵図」(須原屋茂兵衛ら版)か。この年に導入された大区小区制による区分けを青線で、大区小区名を青・赤・茶などの色付き枠で示す。鉄道開業を翌年に控え、建設中の鉄道の路盤が描かれている。一部の区間では海に築堤を作り、その上に線路を敷いたことが分かる。【メモ】「求版」は原版を買い版權を持つこと。

35 実測東京全図

○成立：明治11年(1878) ○形態：銅版色摺、97×87cm ○監修：塚本明敷 ○校正：河田照 ○発行：地理局地誌課 ●東京とその周辺、かつての江戸四宿(品川宿、内藤新宿、板橋宿、千住宿)を含むあたりまでを描く。明治期に急速に都市化が進む地域である。西は今の山手線まで、東は都

市部の切れる亀戸を通る南北あたりまで。宅地は家屋を描かずに地番を示し、土地の形状が判別できる程度に仕上げている。内務省地理局は明治18年(1885)に地籍・地誌・測量の3課に分かれ、官有地管理や地目転換、地誌編纂、地図調製などを行った。【メモ】経線・緯線を引き、高低差を毛羽模様で示すのは、新時代の技法。

36 東京絵図

○成立：明治14年(1881) ○形態：銅版色摺、51×71cm ○版元：大倉四郎兵衛 ○作図：山村清助 ●文政元年(1818)12月、幕府は勘定奉行所にあった絵図に、江戸市中の範囲を示す「朱引」を行った。朱引内は982町。朱引外は190町89村。さらに、町奉行所の支配地域を示す「墨引」も行った。協議の上、朱引内を「御府内」、朱引外を「地方」と呼ぶことになった。明治に入って江戸は東京となり、何度か区画は改定された。明治11年には15区6部となり、本図では赤い短冊型の枠で示されている。【メモ】大倉四郎兵衛(二代)は東京の地本問屋で、楊洲周延や三代歌川広重、豊原国周の錦絵を出版。次男の孫兵衛(1843-1921)は実業家で、大倉書店、大倉孫兵衛洋紙店(現新生紙パルプ商事)を設立した。

【参考書籍】○『日本古版地図集成』(栗田元次、博多成象堂、1932)

○『日本の古地図』①江戸下町②江戸山の手③江戸郊外④江戸八百八町(新土慶軒編、講談社、1976-77) ○『江戸図総目録』(岩田豊樹、日本書誌体系11、青堂書店、1980) ○『文政年間国図全 復刻』(近藤出版社、1981) ○『江戸郊外の遊覧地』(小野佐和子、造園雑誌46-4、日本造園学会、1983) ○『江戸幕府撰国図の研究』(川村博忠、古今書院、1984) ○『江戸図の歴史』(飯田龍一・俵元昭、築地書館、1988) ○『図翁 遠近道印一元禄の絵地図作者』(深井甚三、桂書房、1990) ○『江戸切絵図』(別冊歴史読本52、新人物往来社、1994) ○『国絵図の世界』(国絵図研究会編、柏書房、2005) ○『江戸幕府撰日本総図の研究-国絵図より集成的官撰日本図』(川村博忠、22世紀アート、2020) ○『近世前期江戸出版文化史』(速見香織、文学通信、2020) 【論文ほか】○川村博忠「近世絵図の地図性-地図の向き」(地理科学45-3、1999) ○平野満「伊豆七島全国 附無人島八十嶋図」『増訂 伊豆七島全国 附無人島八十嶋図/相武房総海岸図』の成立事情と著者一附・小笠原島の旧名「無人島」は「ムニンシマ」(蔵田文庫編集委員会中間報告(2)、明治大学人文科学研究所紀要4、2001) ○三好唯義「近世刊行地図の版元名索引試案-神戸市立博物館所蔵古地図をもとに」(関西大学博物館紀要10、2004) ○伊藤寿和「新出の「下野国絵図」に関する基礎的研究」(日本女子大学紀要64・文学部、2014) ○『酒井捨彦が作製した地図の特色-明治期における一つの民間地図作製史』(小野寺淳ほか、五浦論叢/茨城大学五浦美術文化研究所紀要23、2016) ○『江戸図デジタルアーカイブ調査』(栗原智久、江戸東京博物館研究紀要6、2016) ○「赤水図の変遷」(長久保赤水顕彰会報「飛耳長目」34、2024) ○『東京23区のおいたち-東京都都市地域の自治史』第9版(公益財団法人特別区協議会、2026)